

第4回 中心部震災メモリアル拠点検討委員会

日 時 令和元年9月1日(日) 15:00~17:00
会 場 せんだいメディアテーク1階 オープンスクエア
出 席 者 遠藤智栄委員、大泉大介委員、佐藤翔輔委員、佐藤泰委員、志賀理江子委員、
野家啓一委員、マリ・エリザベス委員、本江正茂委員

- 議 事
- 1 開 会
 - 2 議 事
 - (1) 中心部震災メモリアル拠点の検討経過について
 - (2) 市民参加イベントの開催結果について
 - (3) 中心部震災メモリアル拠点の役割について
 - (4) 今後のスケジュールについて
 - (5) その他
 - 3 閉 会

配布資料 資料1 仙台市震災復興メモリアル事業における拠点の位置付け
資料2 中心部震災メモリアル拠点検討委員会における検討状況
資料3 市民参加イベント『これからの震災メモリアルを語る
～東日本大震災の経験を未来につなぐ拠点とは～』報告書
資料4 今後のスケジュールについて

○事務局(庄子課長)

ただいまから第4回中心部震災メモリアル拠点検討委員会を始めさせていただきます。
本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。本日の議事進行につきましては、委員長にお願いしたいと存じます。野家委員長、よろしくお願ひいたします。

○野家委員長

委員長を務めます野家です。本日はよろしくお願ひいたします。

それでは、今回は市民参加型ということで、この委員会にとっても初めてのことなのですが、市民の方にも発言していただけるという検討委員会ですので、よろしくお願ひいたします。

今回参加した皆さんが議論の内容を共有しやすくするために、メディアテークの皆さんに協力いただいて、考えるテーブルを用意いただきました。短い時間ではありま
すけれども、闊達な議論が展開されることを大いに期待しております。

それでは、議事次第に従って会議を進めてまいります。まず会議に係る留意点につ
きまして、事務局の方から説明をお願いします。

○事務局(庄子課長)

それでは初めに傍聴の方へのお願いです。本日お配りしております「会議の傍聴に際
し、守っていただきたい事項」をご覧ください。

一つ一つ読み上げいたしません。今回は市民参加型ということで、傍聴の方もご登

言いただける機会でございますが、委員長から発言を求められるまで静かに傍聴いただきますようお願いいたします。

また、本日の会議を記録するために、動画、写真を撮影させていただきます。撮影した写真は仙台市の広報などに使わせていただきますが、撮影を希望されない方、広報などへの掲載に不都合がある方がいらっしゃいましたら、こちらに挙手にてお知らせいただくか、後ほど事務局までお知らせください。

また、本日ニュース映像に使用されるために報道各社の撮影も入っております。こちらニュースなどに使われるのに不都合がある方につきましては、できるだけ早いタイミングで挙手または事務局にお知らせをお願いいたします。

次に、配布資料を確認させていただきます。

本日は委員の皆様のお座席に、次第と委員名簿、座席表、資料一覧、資料1から4を置かせていただいております。傍聴の皆様にも同じものをお配りしております。資料の不足がございましたら事務局までお知らせください。大丈夫でしょうか。

続きまして、本日の出席状況について報告いたします。

本日は植田委員から欠席の報告を受けておりますが、委員9名中8名の委員にご出席いただいておりますことから、要綱第5条第2項による定足数を満たしていることをご報告申し上げます。

それから、本日も議事録を作成いたしますので、ご発言の際にはマイクを使ってお話しください。傍聴の方にご発言いただく際は事務局がマイクをお持ちしますので、それまでお待ちください。

事務局からの留意点は以上でございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。

それでは議事に入ります前に、本日の議事録署名委員を指名させていただきます。前回は植田委員、その前は遠藤委員をお願いいたしましたので、本日は大泉委員にお願いしたいと思いますのですが、よろしいでしょうか。

○大泉委員

はい。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。それではただいまより本日の議事に入ります。

まず1番目の議題は、中心部震災メモリアル拠点の検討経過です。本日お越しいただいた傍聴の方の中には、これまでの経過をご存じないという方もいらっしゃるかと思いますので、まずはこれまでの検討経過について、事務局の方から説明をお願いいたします。

○事務局（庄子課長）

それでは、中心部震災メモリアル拠点の検討経過について説明いたします。

資料1の仙台市震災復興メモリアル事業における拠点の位置付けという横長の資料をご覧ください。

これまでの経過でございますが、平成23年3月11日に東日本大震災が発生いたしまして、その後、平成26年の12月に仙台市震災復興メモリアル等検討委員会が仙台市に提言をしております。その提言を受けて、平成27年の12月に地下鉄荒井駅舎内にせんだい3.11メモリアル交流館が開館、平成29年の4月に震災遺構仙台市立荒浜小学校が開館、そして今年1月、中心部震災メモリアル拠点検討委員会が発足いたしまして、先日、今年の8月でございますが、震災遺構仙台市荒浜地区住宅基礎を公開しております。

2ページ目に移ります。

仙台市震災復興メモリアル等検討委員会の提言と取組状況のご説明をいたします。

メモリアル等検討委員会の提言では、メモリアルに込める願いとして、「時を経て世代が替わっても災害から命を守るために仙台市民一人ひとりが東日本大震災の記憶と経験を未来へ世界へつなぐ」という言葉と、「地域資源を引き継ぐ」「記憶と経験を形にする」「明日へ向かう力を育てる」という3本の柱に沿った6つの取り組み、これを拠点整備による事業展開でというご提言をいただいております。

詳細を説明いたしますと、まず3本柱の6つの取組の方向性です。

1つ目の柱、「地域資源を引き継ぐ」。

これは「東部地域におけるみどりの再生」、それから「貞山運河の再生と利活用」、こちらを取組の方向性としたしまして、現在主な関連事業として、例えば、「東部地域におけるみどりの再生」であれば、ふるさとの杜再生プロジェクト、居久根の保存・再生、農業園芸センターの再整備などの取組が進んでおります。「貞山運河の再生と利活用」は、貞山運河に関する情報発信や荒浜の灯籠流しなど、海岸公園の整備、みんなの橋、そういったような取組が進んでおります。

上記のほかにもRE:プロジェクト、3.11オモイデツアーなどの取組もございます。

次のページに参ります。

2つ目、「記憶と経験を形にする」柱の事業でございます。

こちらは「モニュメントと遺構による記憶の継承」と「市民力によるアーカイブの整備と利活用」が取組の方向性となっております。

主な関連事業としたしまして、仙台市の方でモニュメントを整備したり、荒浜小学校住宅基礎などの震災遺構の整備をしているほか、みちのく震録伝をはじめ、大学、NHK、民間などにおいても、アーカイブ等に取り組みまれております。

3つ目の柱として、「明日へ向かう力を育てる」。

こちらは「文化・芸術の力を復興と記憶の継承に生かす」、そして「知り学ぶ機会をつくる」が取組の方向性となっております。

私どもの方で行っている事業もございまして、例えば311「伝える/備える」次世代塾といったような活動ですとか、キャンドルナイト、HOPE FOR project、七夕の折り鶴プロジェクト、そういったような取組も行われております。

それでは、5ページ目をご覧ください。

このような取組について、組織設置と協働による事業推進が提言されております。事業推進に必要とされることとして、組織の設置と多様な主体との協働、事業推進における留意点として、多様性と変化への対応、経験をつなぐ手法を生み出す、こういった提言をいただいております。

また、その拠点整備による事業展開でございますが、これらの各取組を有機的に結び、震災の記憶と経験を未来や世界へつないでいくためには、継承のための拠点が必要であ

り、仙台市では中心部と沿岸部でそれぞれの場所の特性を生かしながら事業を展開することが有効であるご提言いただいております。

その継承のための拠点として、(1)被災の跡が見えなくなった中心市街地と、津波による震災の跡が残る東部地域。近いながらも被災状況に違いのある二つの地域をつなぎながら、震災の記憶と経験を伝えることが大切。また、東北の中心都市として、東北各地、宮城県沿岸部への訪問につなげる玄関口の役割を果たすことも求められる、こういったような拠点の必要性が提言されました。

その中心部と沿岸部拠点の役割分担といたしまして、中心部の拠点は、市民一人ひとりの震災体験、津波被災・宅地被災の状況、長期化した不自由な生活の様子など、そこに込められた想いも含め収集・編集し、発信する役割を担う。沿岸部の拠点は、津波被害を受けた現地を訪れ、震災の記憶と経験を知り学ぶ沿岸部回遊の出発点の役割を担うという提言をいただいております。

そして、最後の6ページをご覧ください。

今申し上げた拠点の展開を図示したものでございます。

沿岸部の拠点として、私どもはせんだい3.11メモリアル交流館を整備いたしました。そして、震災遺構荒浜小学校、住宅基礎を整備しております。

今回、私どもが検討しているのはこの赤い丸のところ、中心部の拠点のところ。中心部の拠点について、それが建物なのかどうかも含め検討を始めているところでございます。

では、検討委員会の状況をご説明いたします。資料2をご覧ください。

資料2は、これまで1月から開催されてまいりました検討委員会の第1回から第3回までの議論の内容をまとめております。

意見の分類といたしまして、一番上についておりますA3の紙です。検討の進め方はどうあるべきか、拠点を考える上での大切な視点は、それから何のための拠点なのか、拠点の具体像や施設の可否をどう考えるのか、その他のキーワード、現在はこのような形に分類して意見の整理をしております。

意見の整理につきまして、第1回、第2回の方は資料を公開しておりましたので、第3回目の意見を中心に説明をさせていただきます。A3の紙の2ページ目でございます。

検討の進め方はどうあるべきかというところで、まず先に何をやる場なのかを考える。施設が必要か否か言う前に、何をやるのか考え、それに必要な人を準備する方が大事であり、その人たちと一緒にどんな場所が必要なのか考えるくらいでなければ生きて場所をつくれない、そのようなご提言をいただいております。

それから、過去の事例に学ぶといったところで、広島平和記念資料館の展示の更新のことですか、あとは2番、拠点を考える上で大切な視点ということで、東日本大震災はどのような経験だったのか議論しておりましたが、第3回では原発事故の位置づけのご意見などもいただきました。

それから、拠点を考える上での視点で、仙台の中心部で展開する意味は何か。これで仙台の特質というところをまず考えまして、①東北の拠点であること、②市民力のまちであること、③繰り返してきた災害の歴史があること、こういった視点でご議論いただきまして、前回は東日本大震災の全体像の発信に関する意見、それから東北の拠点ということで、信頼できる独立メディアの成立なども必要でないか、こういったようなご意見をいただきました。

また、②の市民力のまちというところでは、市民がいろいろなアクションを起こしてきたことが魅力的で、仙台にしかないユニークさの一つですが、その記録や現場に出会うすべがなく、今つなぎ手が不足していること、そういった人材のことをご意見いただきました。

また、繰り返してきた災害の歴史というところで、災害文化の拠点としてこの中心部を位置づけることができるのではないかとのご意見もいただいております。

また、中心部で展開する意味として、(2) 中心部の場所性とは何かというところで、例えば②沿岸部のみならず全てが被災の現場であるのご意見をいただきました。

めくっていただきまして、4 ページ目です。

では何のための拠点なのかというところで、まず [1] 過去の犠牲を無駄にせず世代を超えて東日本大震災の経験をつなぐための拠点であると。第3回でそこに補足されていた意見といたしましては、例えば持続的な動きが必要ですがけれども、その持続的な動きのために災害文化をどうしていく取組ですとか、市民行事が必要なのではないか、人や組織が必要なのではないか、そういったようなご意見をいただきました。

また、②何のための拠点なのかの一つとして、多様な経験、あらゆる人に受け入れられる物語、矛盾と複雑さを受け入れるとこでなければならないのではないかとのご意見をいただきまして、特に多様な経験の総体と個々の経験へのアクセス、また複雑さを複雑なままに伝える独立したメディア、複雑さを保つアーカイブと人や時代に応じたキュレーション、こういった部分についてご意見をいただきました。

めくっていただきまして、5 ページ目です。

何のための拠点なのか、[2] あらゆる危機を乗り越えるための拠点。例えば④人間としての生きる力を高める仕組み、そういったような要素もあるのではないかと。そして、市民のアクション、先ほど市民力のまちというキーワードも出ておりますが、その市民のアクションにつなげる仕組みとしてコンセプト、人材。この人材を育てていくことの必要性もご意見いただいております。

そして、5 ページ目の下の方、何のための拠点なのかの [3] 都市の未来のために。災害文化・アイデンティティを創造する仕組み。仙台でやるからには仙台市民に恩恵がなくてはいけないのではないかとといった視点から、災害文化・アイデンティティを創造する仕組み、災害の経験を整理し続け、世界に共有していく活動の拠点となる、そういったようなコンセプトが大切ではないかというご意見をいただきました。

最後に6 ページ目です。

伝承一般として、現場・人・物のセット、アーカイブ、多くの人が訪れるなどのキーワードもいただいておりますが、Q4 拠点の具体像や施設の要否をどう考えるのかというところで、先ほど1枚目でも申し上げましたけれども、施設が必要か否かを言う前に、何をするのか考え、それに必要な人材を準備することが大切。施設をつくるにしても、それを運営し育てていく人づくりとのタイアップが必要とか、災害を考えるだけの場所ではなくアーカイブのように機能的なものを備えつつ、メッセージ性を広げるモニュメントのようなものはあった方がよいですとか、そういったようなご意見をいただいております。

最後に、その他のキーワードとして、ほかに例がない取組で、海外からユニークで魅力があると思われるようなことを大事にしたいということですか、防災メモリアル施設の東北版を仙台にもう1つつくるのではユニークではないという意見とか、あとはラ

ジオ的なもの、声で伝える、そういったようなキーワードもいただいております。

事務局からの説明は以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。

ご質問については、次の市民参加イベントの開催結果についての説明を伺った後で、まとめてお聞きしたいと思いますのですが、よろしいでしょうか。

それでは、次の議事に移ります。

2番目ですが、市民参加イベントの開催結果についてです。市民参加イベントの開催結果について、事務局から資料の説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは、市民参加イベントの開催結果について説明いたします。

資料3の市民参加イベント『これからの震災メモリアルを語る～東日本大震災の経験を未来につなぐ拠点とは～』報告書というA4の資料をご覧ください。

開催概要といたしましては、中心部メモリアル拠点の検討状況、それから「カタストロフの記憶とメモリアル」の講演、ワークショップをさせていただきました。講演については、「カタストロフの記憶とメモリアル」という内容で、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所、客員准教授の寺田匡宏先生に、記憶、それを残していくこと、伝えていくことについて、公定記憶と公共的記憶、そういったようなことについてご講演をいただきました。

ワークショップの方をメインで説明をさせていただきます。

5ページ目をお開きください。

ワークショップは、前半と後半に分けて実施いたしました。前半では中心部震災メモリアル拠点は何をやる場か、そこで大切にしたいことは何か、そして中心部震災メモリアル拠点は誰のための場かということでキーワードをまとめていただき、後半ではそのキーワードを実現するにはどのようなことが必要か、何をどのように行う必要があって、その拠点ができたらどのように使われてほしいか、そういったような内容でワークショップを実施いたしました。

ワークショップの前半について、8班に分かれて行いましたが、そのキーワードをざっくり読み上げさせていただきます。

6ページ目、第1班のキーワードです。

①きちんと記録がなされ、被災された方が思いを語れる場所。一回語って終わりではなく、時間が経っても語り直しができる場所。

②カフェスペースや物産市などのイベントがあった方が、気軽に市民や出張中の人、観光客が訪れるきっかけになり、愛される施設になるのではないかと。

③東北、世界に発信する拠点として、言語を超える伝え方も大事というキーワードをいただいております。

めくっていただいて7ページ目、2班です。

①後ろめたさ。市中心部につくる意味とは。沿岸部に比べて震災を語れない雰囲気がある。それをオープンに語り、コミュニケーションをつくれる場に。外部の人が気軽に語れる場に。

②災害文化。災害文化をつくる拠点として水を蓄えるだけではなく、震災に対応できる仕組みをつくる。それを市のアイデンティティにする。

③ともにつくる。行政主導ではなく市民、NPOなど、みんなで作っていく。ポジティブなこともネガティブなことも伝えていく。

次のページ、8ページです。第3班です。

キーワード①被災地が広範囲なので、岩手などにも手を広げなくてはならない。

②インフォメーションセンターとして発信。東北を俯瞰するようなものと表に出にくい個人の声を両立できる施設。

③守れなかった命などの反省。公的な場所では出なかった意見を東北や日本に伝えていく。

めくっていただきまして、9ページ。4班です。

キーワード①集まりやすい場所。子どもたちが遊びのついでに訪れられる場所。被災者が集まって語れるような場所。

②記憶を伝えていく。上手く伝えるために抽象化しつつ、どんな動きがあったか人間のたくましさ、強さを未来へ伝え、自ら学んでいるうちに他人事が自分事になるような見せ方。

10ページ。5班です。

キーワード①防災。地震や津波被害以外だけでなく、豪雨対策など、「平時の防災」を主導するような場にする。しかし、一方で神戸の人と防災未来センターと同じような「防災」の機能を持った施設ではない方がよいという意見も出ました。

②インキュベーション。伝えていく、残していくための仕組みを構築する場。展示をつくったら終わりではなく、アップデートして市民に伝え続けていく場。

③有機的なネットワーク。東北の玄関口として、外から来る人や震災のことを知らない人たちを、沿岸部につなぐ。個人的な体験を怖さではなく、共感で伝えていく。

めくっていただきまして、11ページ目。6班です。

キーワード①継続して議論していける場。すぐに答えが出るものだけではない。

②震災を経験として学んだこと、さまざまな知見を伝える場。時間軸（未来へ）と空間軸（日本全体や世界へ）の2軸の広がりを意識する。

③震災遺構、メモリアル交流館といった、既にあるものとの連携やネットワークを生かす。

12ページ。7班です。

キーワード①仙台市は被災地の中でも、津波被害があった唯一の政令指定都市。そこを訪れたときに美しい海を思い出せる場。

②自然、歴史の中で、自分が今どういった位置にいるのか実感できる場。頭で学ぶよりも実感できる場。

③実感を通じ、ストーリーに落とし込み、自分事化することで、自らアクションを起こさせる場。個人的な意見を集めながら、ハブとして発信できるかが大事。

めくっていただきまして、13ページです。8班。

キーワード①ふらっと立ち寄れる場。意識の高くない人でも普段の延長でふらっと来られるように。今モヤモヤしている人が一歩踏み出せるように。

②学ぶ。被災地の情報を知るだけではなく、能動的に勉強したり、人の生きる力を学べる、蓄えられる場に。

③ハブ。沿岸部とつながるように。貞山運河とメディアテークの2拠点で展開するプロジェクトのように、中心部と沿岸部の連携が取れると動きやすい。

こういったキーワードを受けまして、ワークショップ後半では、テーマだけお話しいたします。テーマとして、次のような内容でお話をいたしました。14ページの一番上です。

1班は、「誰でも気軽に集える場」。そのようにするにはどのようにしたらいいか。

めくっていただきまして、15ページ。2班。「経験を伝え合う場」。経験を伝え合う場にするためにはどのようにすればいいか。

16ページ、第3班。「東北と市民の災害文化を育む場」。

めくっていただきまして17ページ、第4班。「学ぶ場」。

18ページ、第5班。「対話・議論をし続け、変化が起きる場」。

めくっていただきまして、20ページ、第6班のテーマ。同じく、「対話・議論をし続け、変化が起きる場」。

めくっていただきまして、21ページ、7班。「経験を伝え合う場」。

次のページ、22ページ、8班。「有機的ネットワークのハブになる場」。

こういったような内容で、意見を交換していただきました。

最後、23ページから25ページにはアンケートの集計結果を掲載しております。ご覧いただけたらと思います。

資料の説明は以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。

ただいまワークショップを含めた市民参加イベントについて、非常に詳しくご説明をいただきました。

先ほどの検討経過と合わせまして、まず委員の皆様からご質問等ありましたらお願いをします。

ありませんようでしたら、今日ご参加いただきました傍聴の皆様からご質問ありましたらお受けしたいと思います。次の討議の方に時間を割きたいと思いますので、質疑応答の時間は短いですが5分程度とさせていただきます。ご質問ある方は挙手していただき、ご氏名に続けてご質問の内容をお話しいただければと思います。

では、前の手を挙げられた方、お願いします。

○傍聴者

ちょっと意味がわからないんですが、資料3の7ページでしょうか。キーワードの2番目で、災害文化。「災害文化をつくる拠点として水を蓄える」という、ここがちょっとわからないんです。ちょっとそこを教えていただきたい。

○野家委員長

これは事務局の方から、7ページの真ん中。災害文化で、「災害文化をつくる拠点として水を蓄えるだけではなく」と、その「水を蓄える」というのは具体的にどういうことかについて、ちょっと説明いただければと思います。

○事務局（庄子課長）

それでは、事務局の方で説明させていただきます。

「水を蓄えるだけではなく」という表現をされていますが、基本的にはその情報を集めたり、資料を展示したり、アーカイブをしたり、それだけではなくという趣旨かと思えます。

なお、災害文化については16ページの真ん中辺の写真のすぐ下に、「災害文化とは災害があることが当たり前であると考え、日常化することであり、生活に落とし込むためにどうすべきかを話し合った」という行があるんですけども、災害文化が、こういったような災害があることが当たり前で日常化すること、それを生活に落とし込むためにはどうすればよいかというようなところでしたので、日々変わっていくというところで、「水を蓄えるだけではなく」という表現を使ったかと思えます。

○野家委員長

よろしいでしょうか。少し比喩的な言い方をしたのでわかりにくかったと思えます。

○本江副委員長

典型的な災害対策で、水を備蓄しておきましょうというのは典型的なことのひとつの例えとして出てきていると思えますので、それだけに限らず、もうちょっといろんな角度から災害のことを考えることができるようにしましょうという、そういう比喩として挙がっていると思えます。

○野家委員長

よろしいでしょうか。ほかに何かご質問ありましたら。前の方、どうぞ。

○傍聴者

ネットの方ではどういう対策とかをやっているのでしょうか。よく震災とかでは、デマとかの迷惑行為とかがよくあると聞いています。熊本のときもそうだったんですけども、やっぱりそれも教訓にして何かやっているのでしょうか。

○野家委員長

災害時にはいろんなデマが、流言、飛語が飛び交ったりすることがよくあるわけですが、それに対する対策というのはどう考えているんだというようなご質問ですが、もし委員の方から何かレスポンスがありましたら。それじゃあ事務局の方から、何かこれまでの検討の内容に関連するようなことがありましたら。

○事務局（梅内次長）

おっしゃるとおり災害の際にはデマと言っていいのかわかりませんが、いろんな情報が出回るといえることがありまして、市の方でも最近ではツイッターやSNSなどいろいろな媒体を通じまして、危機管理の方から市民の皆様にごできるだけ正確な情報をお伝えできるように努力しているところではあるんですけど、今回の場合には先ほど来ご説明しておりますように、中心部震災メモリアル拠点の役割という議論でございますので、そのことについては市の災害対応ということで重要な点ではあるものの、この委員

会の中では、まだ余りそういった議論を中心に行っていないという状況でございます。

○野家委員長

よろしいでしょうか。

○傍聴者

わかりました。ありがとうございます。こちらの方、できるだけ、ちょっと強制はできませんけれども、急いで対策できるように頑張ってください。

○野家委員長

心にとめておきたいと思います。

ちょっと時間が押していますので、質疑応答をここで一旦打ち切らせていただいて、次にまた発言の機会がございますので、議事3の方に移らせていただきます。

3番目は、中心部震災メモリアル拠点の役割についてです。これが今日のメインのテーマということになりますけれども、これまで3回の検討委員会と市民参加イベントでアイデアをいただいて、さまざまな検討課題が浮かび上がってきたわけですが、ここからは拠点の軸は何かという観点から意見を交わしていきたいと思います。

今回、この分に関する資料はございません。議論を深めるために、こちらに黒板を用意しておりますので、この部分のファシリテーターは副委員長の本江さんをお願いすることになっておりますので、副委員長の方から進行をお願いしたいと思いますのでよろしく申し上げます。

○本江副委員長

今紹介をいただきました副委員長を仰せつかっております本江でございます。

ここからは委員の皆様と公開の傍聴に来ていただいている方と一緒に議論を進めるということで、時間は一応5時ちょっと前までということですので、1時間半ほど、ごく限られた時間ですけれども活発な議論ができ上がればと思います。

今日何かを決めたいということではありませんので、いろいろな意見が出て、それをまた次、最後にこれからのスケジュールの話があると思いますが、参考のご意見として引き継いでいくということですので、遠慮なく活発に委員の皆さんも一緒にお話をしていただければと思います。

既にいろいろな話が出ているというのは、今ご紹介があったところですが、今日の全体的な問いは、拠点の軸は何かということであります。

拠点を、施設じゃなくて拠点と言っているところがみそなんですけれども、仙台市の中心部に何らかのメモリアル拠点がつくられるとして、それはいろんなことがあるよねという話をこれまでたくさん広げてきたので、これからもう少し具体的に絞り込んでいくターニングポイントにしたいということで、こういうことが軸ですよという話を今日はしていければと思います。

軸というのは、車軸の軸ですから、ものが進んでいく方向性を決めるということでもありますし、何かいろいろなものを巻きつけていく中心の棒のこともありますから、何か求心力を持つような考え方、アイデア、ものあるいはシステム、そうしたことについてお話をしていきたいということだと思います。

それで、今日は委員も揃っておりますし、ご参加の方々からの意見も伺いたいので、話が流れていかないように黒板を用意して、最近グラフィックレコーディングとって議論をリアルタイムで目に見える形で記録をしていくという仕事がありまして、それを今日は阿部明日香さんをお願いしております。どうぞよろしく願いいたします。皆さんの意見も書いていただきます。よろしくお願い致します。

では、早速ですけれども、この軸について、この間の8月3日のイベントの感想も含めて、まずは委員の方から順番にお話をさせていただきます。そうすると、それぞれの委員がこんなことを言いました、こういうことが軸だと思いますということが黒板に書かれていきますので、そうしたら会場の皆さんからもお話を聞いていって、それはここの意見に関係がありますねとか、それは今まで出なかった新しい視点ですねとかいうふうにして話が広がっていくというようなことを、これから1時間半ぐらいやらせていただければと思います。そのように進めます。

では、早速ですけれども、前回の8月3日のイベントも踏まえてということですので、ワークショップ全体のファシリテーションをお願いした遠藤委員から順にお話をさせていただきます。お願いします。

○遠藤委員

8月3日の市民参加イベントのときは多くの市民の方にご参加いただいて、どうもありがとうございます。まずは4点私が感じたことをお伝えしたいと思います。

感想としては、やっぱり皆さんが拠点を必要としているのか、必要としていないのか、どっちなのかなというのちょっと感じる場になれたなということと、あととても多様な意見があって、私も考えたことのない観点のご意見をいただいたので、じゃあ自分はどう考えるんだろうということを改めて考えられて、とっても興味深い場だったなと思います。

4つのポイントで感じたことは、やっぱり拠点が要るのか要らないのかという点では、皆さんからのこういうことを伝えたいとか表現したいとか、そういったことがたくさん多方面から挙げられて、やっぱり皆さん、今ではそれが伝え切れていないというか、場がないというか、一定はあったとしてもこれではまだまだ不十分だというようなお気持ちがとても大きいんだなということも、私は受けとめたような気がします。ですので、拠点は必要だなというふうに私も改めて感じた次第です。

そのときに、皆さんの意見がまさに多様だったので、ちょっとそれを簡単に整理すると、まさにマルチステークホルダーで多様な主体で進めるということと、その人たちが多様なテーマを持っているということと、あとは仙台だと都市部から、沿岸から、山間地から、いろんな場所があるので、場所も多様であると。

そして、皆さんのご提案も、調査研究もあれば、記録保存もあれば、活用もあれば、創造もあれば、発信もあれば、活動支援もあるということで、ある意味4つを掛け合わせていくような、すごく難しいけれども面白いことが期待されているんだなと。やっぱりそこが何か1個に絞るんじゃなくて、すごく多様なことをやっていく場なんじゃないかということを感じました。

2つ目が、講演から、記録の仕方が多様にあるということも勉強したと思うんですけども、それが市民参加で行われなかった過去の例もあるということで、やっぱり市民の皆さんは、今回の拠点は市民とともに一緒につくっていきたいというお気持ちですご

く強いので、そこもポイントになるかなということ。

あとは、まさに一人の悲しみとか苦しみということにも向き合いながら、でも楽しみとか創造までやっていきたいということがあるので、やっぱり若い世代を巻き込んだり、東北、世界を見据えるということで、ある意味委員会としても、仙台市としても、本当にそこまでやるんだという決断とか決心が必要。あと私たち委員会の提案も通常の構想よりも一步踏み込んだ具体的なところまですべきなんじゃないかということを感じたということですね。

最後に、市民の皆さんも、参加の皆さんも、何をやるかということもそうですけれども、どうやるかということにすごく関心があるんだなということがわかりまして、そのためにはやっぱり運営をどうするかといったときにやっぱり大事になってくるのは、機動性とか適応力とか、やっぱり頭が大きくて動かしにくいとか、そういった組織にならないような、どうやるかということを経験して考えていかなくちゃいけないなと思いました。

そして、世界を見据えるからこそ、やっぱり仙台市民が仙台の災害ということも、やっぱりしっかりと参加し振り返りつくっていけるということのも大事かなと思いました。以上です。

○本江副委員長

ありがとうございます。多様な人が関わる多様な場所の関連があると。そして、その災害のあり方も多様で、だからこそ記録の仕方や進め方自体も、多様なんですと。まあ、それは複雑ですと言っているのと同じだから、その中でどうするのかということはありませんけれどもね。多様性にちゃんと応えるということが必要だという話かと思いました。じゃあ大泉さんお願いします。

○大泉委員

私も前回のワークショップに参加して、この委員会の中である意味小難しい話を結構してきたわけですね。ある意味細部にも目配りをしつつ、みんなでこの委員会で議論をしてきたわけですが、逆に一般の人とのかけ合いの中で、その中でシンプルなメッセージが私の中では一番響いていて、震災で何が起きたのか、我々はどういうことを経験したのかということだったり、その教訓は何かみたいなことをこの拠点で発信していくとして、学ばせたい人はいる。じゃあそれを学びたい人はどうなのか。子どもたちにも知ってほしいとか、世界の人に知ってほしい、この地域以外の人にも知ってほしいというのはあるけれども、「いや、私学びたいです」という高尚な人がいるのかという問いかけがありまして。修学旅行で子どもを強制的に連れてくればこういうところで学ぶかもしれないけれども、休みになったらお父さんお母さん行こうよみたいな場になるんでしょうかという問いかけが私の中では結構あって。なので、拠点で何を発信するかといえば、やっぱり私は災害文化と言われることなんだろうなと思っていましたし、もう1つやっぱり中心部の拠点に求められるものは、そのワークショップの中でも出てきた言葉なんですけれども、敷居の低さなのかなというふうな気がしました。

どうしても命に関わることであり、悲しい体験、しんどい体験だったので、軽さとは無縁、対極的なんですけれども、一方で何かそういった軽さ、手軽さ、身近さみたいなものを表現、体現していないと、縁遠い拠点になるというのは多分我々が願うのとは真

逆のことなので、やっぱり誰でも気軽にいつでも繰り返し来れる拠点なのかなという気がしました。

災害文化というのは、この委員会でも繰り返し議論されていますけれども、自然災害はいつどこでまた起きるかわからないですよという自然の怖さのことだったり、こと東日本で経験したことからすれば、災害自体は防げないけれどもその被害を減らせる、犠牲は減らせる、防げる。そのためのアクションにつなげる学びが起きる、学べる場なんだろうなというふうに思いました。

繰り返しですけれども、震災で起きたことの重さの対極としての軽さがないと、今後この委員会で含めて議論してきたことが、何か願いと反対の方向に行ってしまうので、そこをやっぱり大事にしたいなと前回のワークショップで感じたところです。

○本江副委員長

ありがとうございます。言葉遣いを慎重にされていることが伝わってまいります。学びたい人が入ってきやすい敷居の低さですね。そうでないと学びたい人が近づくことができないということをおっしゃられたかと思えます。学ばせたい人はたくさんいるけれども、学びたい人は本当にいるのかということも重要なポイントかと思えます。

○大泉委員

そうですね。学ばせたい人はいるけれども、学びたい人が生まれるように、敷居を低くしようということです。

○本江副委員長

ありがとうございます。じゃあ佐藤先生。

○佐藤（翔）委員

前回も今日もいらしている方もいると思います。今日は改めてありがとうございます。

前回参加させていただきまして、冒頭の関心というのは、それまで2回検討委員会の皆さんで話し合っていて、それとどうギャップがあるのか、近しいのかというのがとても気になったんですね。

それで、いろんなご意見があると思いますけれども、私は委員の意見も、皆さんの意見も、おおむね一致していると感じました。もちろん我々の域では及ばないところもたくさんいただきましたけれども、おおむね一致していて、しかも相互に補強し合っている意見ということなので、とても意義のある会だったというふうに思います。

その中で、今日は軸を見出さなければいけないと思うんですけども、大泉さんの意見とほぼ同様になってしまいますが、先ほどの市民参加イベント報告書の12ページ。私は7班でお世話になっていたんですが、そのときに出てきた言葉がその軸をうまく表現しているかなと思います。

私たちは、委員会でも、この場でも、災害文化と一言で言っちゃうんですけども、それをうまくその場の皆さんに言葉にさせていただいたなというのが、このキーワードの中の②と③なんですね。自然、歴史の中で自分がどういった位置にいるのか実感できると。もう少しかみ砕いて言うと、人と自然ではなくて、あくまで自然の中の人間という

ふうに捉えたいんだと。そういったものを実感すると自分の中に落とし込めるということで、とても平易な言葉で言っていただいたので、私は災害の専門家なんですけれども、学ばされてしまったということになります。それが1点目です。

実は、結構この検討委員会の中でも災害文化という言葉がトピックになってしまっているんで、私も最近一生懸命勉強し直しているんですね。その中で、要素としてはどんなものがあるかという、難しい言葉になっちゃうんですが、要素的には「価値」ですね。

○本江副委員長

バリューの価値ですか。

○佐藤（翔）委員

バリューじゃないと思います。あと、「規範」。行動規範の規範ですね。あと、3番が「信念」。どう向き合うかみたいなことですね。4番が「知識」。あと、「技術」と「工夫」と「伝承」です。

多分、価値も規範も信念もいろいろ節々出てきていて、工夫も伝承も節々出てきているんですけども、実は技術というのが出てきていないなというのがとても感じました。いろいろ勉強してみると、災害が起きたときの工夫、起きる前の工夫みたいなのがメインで出てきてしまうんですけども、普段、年間を通して大きな災害にどかんと遭わないのは、実はやっぱり目に見えない技術によって支えられているからということで、こういった部分も忘れちゃいけないんだなと思ったので、今日は頭出しとしてさせていただきます。

具体的に言うと、今私たちがここにおいて、この建物が震度5が来ても崩れないのは、やっぱりこれが耐震性があるとか、普段の雨であふれないとかということも、実は文化の中に含まれるということですね。

あと、これは遠藤さんもおっしゃっていましたが、とても皆さん、関わりたいし使いたいんだというふうにおっしゃっていただいたことの裏返しとして、やっぱりあそこの場に来ていない人の声をいかに聞き取れていないんだなというのも深く反省してしまったというのが正直な気持ちです。大泉さんがその敷居を低くするとおっしゃったんですけども、ちょっとそこにどうにかしてこの検討委員会でアクセスする必要があるのかなと思ったので、補足させていただきます。

以上です。

○本江副委員長

災害文化はずっと出てくるキーワードですけども、この7つの要素があるという話は重要だと思います。ありがとうございます。

じゃあ野家先生。

○野家委員長

この前のワークショップで、私は6ページの第1班の議論に加わりました。そこでもいろんなご意見を伺って大変興味深いいろんなイメージが飛び交ったんですけども、一つはやっぱり記憶というか、まだ8年しかたっていませんけれども、いずれ10年目、

20年目という節目が訪れるんだと思いますが、そういうときにそれぞれの記憶を語り合えるような場というか、時々NHKでも「あの日私は」というふうな番組をやっていますけれども、それを見たり聞いたりすると、やっぱり自分が体験したのは非常にある意味では、あの狭い範囲というか状況、自分の身の回りのことそれだけでも大変だったわけですが、それをほかの人の話を聞くことによって別の角度から自分の体験を見直すというか、そういうふうにしてそれを子どもたちや孫とかそういうふうに伝えていく、そういう語り直し、語り継ぐ、そういう場というのが、一つこのメモリアル拠点の重要な役割かなと思います。

ただ、それだけにとどまらないで、先ほども出てきましたけれども、さまざまなイベントを通じて、未来志向というか災害文化というのがありましたけれども、これからどういうふう防災とかそういったものを伝承し、築いていくのかと。だから、過去に向かう記憶とか記録とかアーカイブとかそういう機能と、それから未来へ向かう防災教育とか、あるいは新しいいろんな演劇とか芸術とか、そういう文化を形づくっている、そういう意味でも拠点になり得るような。ただ、余り難しく考えず、さっき大泉さんが言われたように、気軽に立ち寄って、気軽にいろんな活動ができる、そういうふうな場であることが重要かなと、そんなふうに思いました。

○本江副委員長

ありがとうございます。語り合える場、それから未来志向で考えましょうと。どうしてもあのときは大変だったという話をし続けそうですけれども、それをどう未来へつなぐかということを考えられるような場所でありたいというのは大事だと思います。ありがとうございます。

じゃあ泰委員。

○佐藤（泰）委員

私の参加したグループでは、結構多様な意見が出ていたんですけども、何かとりあえずこういう施設をつくらなきゃいけないよねという前提はそこではほとんどなくて、具体的に何をするのかとか、そのためにどういうことが必要かというような議論が中心になっていました。ただ、出た意見は本当に多様で、さまざまな視点とか、受けとめ方とか、求めていることはあるなということを改めて実感したんですけど、今、皆さんが感想を述べられておりましたけれども、そのうちのどれが必要でどれが不要ないかということは、基本やっぱりない。どれも多分すごく重要な考え方だし、視点なんだと思うんです。ただ、それら全部をやっていくかということ、それはもちろん人間がやっていくことは限界がある。

じゃあどうするか。ここからが軸ということについてなんですけれども、こうした多様なこととか、あるいは過去にさかのぼっていくこととか、未来に向けていくこととか、あるいは今あるいろんな活動をどうつないでいくのかとか、あるいは過去のまだわかっていないことがたくさんあって、それがまたこれからいろいろ調べていくとわかっていたり、まだ語り切れていないことについてこれから語れる人とかというのがいたりするということの中で、これが決定版みたいなことができるタイミングは、絶対もうない。この先、多分永久にそれができるわけではないというふうに考えたときに、だったらそれを諦めるかという選択肢はない。どんどん変わっていったり、どんどん増えていった

り、そういうことに対して、あるときは柔軟に、あるときはしぶとく、それをやり続けていくということがこれからも本当に大切なんだろうと。それが軸になって、これまで出てきた皆さんの感想も、先日の皆さんから、市民の参加の方々からいただいた意見も、そこに織り込めていくものになるんだろうなと思うんですね。

そういった織り込まれていくものが具体的に何なのかといたら、多分それは人の力。さまざまな意見を持続的に集めたり、それを深めたり、掘ったり、また、貯めておくだけでなく、広げていくとか、未来に向けてとか、世界に向けてとか、そういうことをある意味、場合によったら集まった情報を加工して蓄積したり広げていくようなこととかも含めて、そういうことをする組織であるとか人の力というのは本当に重要で、それが軸になるんだろうと思うんですね。それが軸になっていけば、その人たちが一番活動しやすい環境、あるいはその人たちだけではなくてさまざまな市民とか、機関とか、そういうものにも関わってもらわなければいけないので、そういう人たち、さまざまな外部の人たちも含めて社会全体がそこにアクセスしていけるような、そういう受け皿としての組織とかが必要なんだろうと。それが軸になっていくんじゃないかなというふうに改めて思ったところでした。

○本江副委員長

ありがとうございます。人が大事で、その人が力を出せる環境とか、組織とか。環境と言っても、物に限らず組織やシステムなんかのものも必要だという話だったかと思えます。ありがとうございます。

前回の3日のワークショップには僕も出ていて、志賀さんとマリさんは出られなかったということもあるので先に僕が話すと、まさにこういうことをやるために拠点をつくるんだなと思いました。つまり、いろんな人が集まって議論をし続けると。それで、話すたびに、私が知っている震災はごく一部の表情であって、そうでないことがあるなということを繰り返し感じることができる。そういうものとして理解が広がっていくような記憶を語り伝えて、多様であるということが繰り返し実感されるような場所。やっぱり思い出話ってしゃべっているうちにだんだん定型化してきて、再構築されてきて、すごくクリアな話になるけれども、だんだん実際そうだったかということとはズレてきたりするけれども、そんなふうに澱がたまっていたのをまぜ直してもらおうというか、そういう議論をし続けるための場所であることがこの拠点の役割なのかなというのを思った。だから、もう拠点としての活動は既に始まっているという感じがしたというのが一個。もう一つは、先ほど翔輔さんが、災害文化には幾つか側面がありますよねというふうにおっしゃっていて、仙台市は災害文化を持った都市としてアイデンティティをつくっていくんだという話は委員会の議論にも出ていましたが、そうすることで何のメリットがあるのだろうというのを考えたときに、これから来る災害のときの被害を最小化するために災害文化を受け継いでいくことが必要ですと、それは自明なんだが、それ以外にも、災害はこれからますますいろんなところで大きな形で起こるので、仙台に来て拠点来ると、災害のときに何が起こってどんな出来事になるのかということの情報が集まっていてアップデートされていて、こういう言い方は悪いかもしれないけれども、災害ビジネスや、災害に関わる政策立案をする人たちが、まず仙台でいろいろ情報を集めてみようと思うような拠点、災害に関わって何かやろうとしている人たちがまず来る場所になるというのは、災害を受けてそれをてこにして未来をつくる仙台にとっての、力のある

未来をつくる未来志向の一つのイメージとしてあるなというのを感じました。

じゃあ、前は残念ながら来られませんでしたけれども、報告などをお読みになり、またほかの機会でもいろいろお考えになってきたことがあると思いますので、志賀さんから。

○志賀委員

前回参加できなくて非常に残念だったんですが、少し時間があいたことでいろんなことが深く考えられたかなと思っています。

それで、今日のこれも読み返しながら、今日の皆さんの話を聞きながらやっぱり思ったのは、場をつくることはもう確実で、そこに人の集団、いわゆる語り継ぐ集団がいるという2つの状況が重なり合っている。

その場というのはじゃあどういう場かという、拠点ということになると思うんですけども、変化し続ける場というふうになるとしたら、じゃあどういう感じなのかというふうになったときに、やっぱりそれは非常に建築的な取組なんだと思います。そこにたくさんの工夫と技術が入っていることが大事で、その工夫についてたくさん話すというのは、すごく身体的に建築を考えるということですけども、例えばですけども、それは広場であるが、例えばですよ、壁がなくて、けれども屋根があって、まず来た人がその場について何か震災について考えたいとか、何げなくただ来ただけとなっても、まずは腰をおろすためにテーブルと椅子ではなくて、例えばあてがない階段みたいなものをつくって、たくさんの人が座れるようにして、そこに腰を落ち着けて何か思い出すとか、そういうことだったりとか。例えばその時間になると何か鐘のような音が鳴る、聴覚に響くような、身体に記憶させるようなことだったりとか。あとは千羽鶴みたいなことだと思うんですけども、一目で見て、ああこれがいろいろな人の記憶の痕跡なんだということがわかるような部分、壁いっぱい書かれた個人へのメッセージかもしれないし、何かまだ全然違うことかもしれないですけども、建築物というかその場に直接刻まれるような場だったりとか。もしくは、例えば次に何かがあったときに、それは人災、自然災害限らず何かあったときにそこに集まって、限りなく正しい情報のよりどころになる。それがさっきおっしゃっていたデマに対しての対策になるような、そこにはすごく高い技術が必要とされると思いますけれど。

だから、学びたい人がいるのかということも当然あると思うんですけども、でもまず学びたいより先に、震災のことを知りたい、知らないから知りたい、見ていなかったから見たい、もしくは思い出したいという衝動の方が先にあると思うので、それに対してその中にいる人の集団が何をするかということ。

それで今、例えば簡単な話だと、いろんな図書館に震災コーナーみたいなのがあって本が集まっているけれども、震災ということに特化した抽象度の高い低い全て含めたグラデーションのある情報が広く見れるとかっていう、何かそういう場、変化し続ける、刻み続ける場というのと、人の集団というのがセットになっているということはまず不可欠なのかなというふうに思いました。

そこで例えば、次に自分が語り直したいというようなときに、何かDIYのようなことができるような機能を持っているときといいのかなとか、何かをつくることができるとか、自分の声を残すことができるとか、印刷することができるとか。それで、そういうことがある場と人の、それでその人の集団、どんな人がそこで働くというか語り継ぐ

役割になるという人は、そこで自分自身が育っていくというか、災害について学んでいくということ、年度ごとに代わるのではなくて、ずっとその役割を担うということ、それを次の人に伝えていくという、少し市政の中とは違うインディペンデント性をそこで保つというようなことかなと思っています。だからその場に身体性を持たせるみたいなことかなと。

○本江副委員長

ありがとうございます。具体的な場のイメージもお話をいただきましたし、情報を編集していくDIYのような場所、何か加工して、それが受け手としてもらえるというだけじゃなくて自分が発信するのを助けるようなイメージなんかもお話にあったかと思えます。ありがとうございます。

じゃあマリさん。

○マリ委員

私も先月のワークショップに参加できなかったのも、とても残念で申し訳ないです。すごく興味深くて、本当に住民と一緒に作るものと思ひまして、内容は聞きまして、すごく感動しまして、やっぱり今までの委員の会議の中もちょっと超えて、いろんなテーマとかいろんな考え方が本当に幅広いという感じがします。

それは3つのポイントが、簡単なことなんです。一つは、すごく総合的なことで、防災だけでなく、本当に総合的に社会のための施設をつくるということも、それは仙台市は住民の力があるまちというキーワードもいただきまして、やっぱり拠点をつくることは防災だけでなく、本当に社会を生かすとか、NGOを活発にできる場所とか、住民が利用できるような、すごく感じていました。

2つ目は、課題、話題提供、余り結論ではないんですけども、これから検討することも、仙台っぽいものと、仙台を超えるものをどういうふうに調整するかというのは当然のことかもしれないですけども。

3つ目も、皆さんのワークショップの話の中にも、以前も私たちも議論になったことなんですけれども、スケールの、いろんなスケールに個人からコミュニティー、コミュニティーからまち、まちから地域、中心部から沿岸部、東北地方、宮城から岩手から福島から全世界につながるものが、いろんなスケールと同時に考えられないといけないなと思ひました。

ちょっと簡単ですけども以上です。ありがとうございます。

○本江副委員長

ありがとうございます。社会のための施設で、仙台らしいもので、さらにそれを超えていくようなもので、いろいろなスケールで。今まで出てきていなかった論点を示していただいたかと思ひます。

ここで一巡しましたね。

せっかく来ていただきましたので、なるべくたくさんの方からお話を伺いたいと思ひますし、聞きっ放しじゃなくてそういう意見が出てきたけれどもどうですかというこの委員の皆さんとまた話をしたいと思ひます。

こうした委員会というのは、普通は行政の方から原案が示されて、委員会のメンバー

の人たちがそれを見て、コメントしておわるような形なんですけれども、この委員会は始まったときからちょっと変わってしまっていて、原案がないんですね。本当にどうしたらいいかわからないからみんなで考えるということをやっている、どうもこの委員だけだと心細いので、まちの人を入れながらやりましょうというので、この間のワークショップもあったし、今日もセットされています。ここがどうなっているんだみたいなことを言うよりは、こういうのをちゃんとやらないとだめだみたいなことをちゃんと教えていただきたいという会です。

軸といってもまだ振れている状態ではありますが、これまでの3回の会議やこの間のワークショップも含めたことから、こんなことが肝だよねということは出てきておりますので、こういう話が抜けているじゃないとか、今出てきた意見の中でここは本当に大事だと、こういう意味で大事だからちゃんとやってねとか、そうしたことで、この中心部の拠点がどのようなものであるとよいのか、どういうことが軸になっていくのかという議論をみんなでやっていきたいというのがこの会であります。

まだ50分ぐらいありますので、それなりの数の皆さんからお話をいただければと思います。まとまっていないからとか、そんなことは心配しなくていいので、思っていることを教えていただければと思います。挙手をしていただいて、お名前だけ頂戴してからご意見をいただければと思います。お願いします。どうぞ。

○傍聴者（高井康裕氏）

高井康弘といいます。前回も参加させていただきました。

今回のメモリアル拠点を中心部にとということですが、私が考えるには、沿岸部より中心部の方が、箱物をつくるにしてもお金がかかるだろうなど。予算の話というのは前回も全く出ていなかったんですけれども、その辺のことはどうなのかとか、運営とか、当然ものをつくれれば管理費用もかかるわけですから、その辺のことは一体いつぐらいから出てくるのかなと思っていたんですけれども、今回もこのままいけば出てこないなと思いましたのでお話をさせていただきました。

○本江副委員長

ありがとうございました。そこら辺のことが心配だということですね。

○傍聴者（高井康裕氏）

税金から必要になってくると思いますので。以上です。

○本江副委員長

おっしゃるとおりです。ありがとうございます。

公金を支出して、仙台市でやると。維持するんだから当然年々の予算も要りますよねというお話で、落とすところが決まっているわけではないので、予算も定まっていないところではありますが、重要な点です。市の施設として公金を支出してやっていく。それでどのくらいの金額がかかるのか、それは税だろうというお話に対して、どういうふうに運営、予算との関係でやっていくのかと。委員会の議論の中で少し出ていたところだと思います。

何か委員の方で、予算のことだったらこういうことが大事みたいなことがあれば、重

ねて言っていたけるといいんですが。

先ほど志賀さんが独立性、インディペンデンスの話をしたことと少し関わるかと思いますが、何かあれば。

○志賀委員

場所を持たずとも、どこか風呂敷的な感じで、常にそこが場になるという。そこで、何もなかったとしても、自分たちは何かを語り継げるのかという、そういうふうに最初は考えていましたよね。

それで、そこからやっぱり場が必要だ、ハードが必要だみたいな内容になっていくときに、当然、その予算をどうするかということは必要だと思うんですけども、でもそれよりも前に、どんな気持ちで、私はさっきDIYというふうに言いましたけれども、DIY的に記憶というものと、今後の社会に対して震災がどういう意味を持つかということは、まず自分の体一つで語り継げることだと思うので、その予算がどれぐらいあるのかというのは私は正直わかりませんが、まずは体を資本に考えるということ。あと、体の機能とか工夫とか、そういうことをたくさん考えていくことで、その予算に見合ったやり方ができると思っています。なので、体から離れない、決して離れないことというのが、予算を考えるときに必要になってくるかなと思います。

○本江副委員長

ありがとうございます。

○佐藤（泰）委員

これまでの議論の中でも、これを例えば運営していくのにどういう考え方があり得るかという議論の中で、この間の市民の皆さんとのお話でもあったと思うんですけども例えば、情報が集められて、語られていくときに、お役所とか行政が中心となって全てを賄っていると、行政にとって余りありがたくない話とかがなかなか出てきにくくなったり、公にしにくくなったりということもあり得るので、もちろん役所に限らずですが、単一の組織に依存するあり方から何かできるだけ自由な組織であるべきじゃないかという話があったんですね。

ということを考えると、予算は全部仙台市なのかもしれないけれども、今の段階でそれがベストだというふうにはやはりちょっと思えないところがある。ほかに出すところがあるかないかというのはもちろん大きな問題なんですけど、ただ今の段階で考えることは、仙台市というところで全て考えるのではなく、いろんな主体が本当に主体的に関わってお金も出し合ってやっていくようなことの方が本当は望ましいんだろうなという議論がこれまでもあったということは、ご報告したいと思います。

○本江副委員長

何か独立性があって、それはつまり財源も含めてですけども、それがインディペンデンスを保たないと、ここから発信される情報が、何らかの政治性を持ったものになると、信頼が得られないではないかというような議論はしていたところでもあります。

それから僕が申し上げた、この施設が仙台にあることで、どれだけ見返りがあるのかというか、仙台市に対して何らかの投資が行われるとか、人が来るとか、何かそこで

ちゃんとバックがある。ただ必要なことだからとにかくコスト垂れ流しでやるということじゃない、何かそういう視点も組み込まれていないといけないなという話はしていたところかとは思いますが。

ありがとうございます。よろしいでしょうか。

ほかありましたら。どうぞ。お名前と内容をお願いいたします。

○傍聴者（佐藤亜矢子氏）

泉区から参りました佐藤亜矢子と申します。前回の会議の中でもちょっとお話をしたかったんだけど、時間がなくて意見も言えなかったというところも含めて。

そもそも拠点をつくった方がいいのかどうかみたいな意見もちょっと出たかと思うんですけど、私自身は拠点というのは必要だと思うんですね。特に政令指定都市でもありますし、さまざまな災害、東日本大震災以降も洪水であるとかいろんな災害というのが、今後も含めて起こっていくと思います。

やっぱり防災センターという名前が適切かどうかわからないんですけど、教育とかいろんなことも含めて、そういう機能を持って、さらに研修とか教育機能もあわせ持つ拠点というのは絶対に必要だなと、今後つくっていただきたいなというふうに思っています。その際には、例えば行政から、消防であるとか、危機管理室とか、縦割りとかというのを越えた、それで先ほど出ていたみたいな、もしかしたら仙台市だけではなくて、宮城県であるとかそういうところも巻き込んでいけるような、そういうものが必要なかなと思いますし、市民からも、いわゆる有識者とか専門家の方々だけではなくて、私のように地域で防災とか、ほかにもたくさんまちづくりに携わっている、しかも多様な方々というのがいらっしゃるので、皆さんが垣根なく参加できるような場であってほしいなというふうに思っています。また、そこでさまざまな立場の人たちが意見を出し合って、それをまとめて提言なども上げられるような、そういうふうな場であってほしいなと思っています。

また、県外からの旅行であるとか、研修であるとか、いろんなエクスカージョンなんかの、そういうコーディネート機能なんかも持てるようにしたら、先ほどおっしゃっていたようなお金を生むというか、そういうこともできるのではないかなというふうに思っていますし、その際にぜひその現地の方々、土地の方々を巻き込んで、拠点から沿岸部、いろんなところに皆さんに実際に行ってもらえるような、そういうような機能ができたらなと思っています。

それも何か被災地ツアーだけではなくて、そこで確かに人々の営みがあったんだというような、悲惨だけを伝えるようなことではないような、そういう活動であるといいかなというふうに思っています。

前に、石碑をつくるだけでは忘れられちゃうんじゃないかなというふうなこともあったんですね。ただ、逆にそれがないと、思いとか、思いが強い人が少なくなってしまうとか、人間関係から活動などが空中分解してしまったり。もしかしたら、今から何十年後に震災を全く経験していない人ばかりの社会になったときに、そのときにももしかしたら今ほどいろんな自然災害が起こらなくて、その時代はちょっと平穏な時代だったりすると、もしかするともうそういう活動のための予算って必要ないかななんて思ってしまうことがあったら困るなと思うので、そういうのも含めて、やっぱりちゃんとしたことを伝え続けていけるような、箱物がいいのかわからないんですけど、拠点とい

うのは本当に必要であるし、そういう拠点があることによって伝えていく人たちのつながりを残していくということが必要だったと思うんですね。1つ目はそれです。

あと、もう1つ。確かに中心拠点、ものをつくるよりはまずは内容であるという意見もたくさん出たと思うんですね。であれば、逆転の発想というか、じゃあその拠点がいつできるのかとか、予算はどれぐらいつくのかとか、どんなものができるかということが決まる前に、メモリアル拠点がじゃあできたとしたらどういう活動をしたらいいのかなとか、どういうネットワークをつくったらいいのかなとか、今の時点、本当にいろんな団体、さまざまな思いを持って活動されていると思うんですね。

だからぜひ、箱物であるメモリアル拠点を つくる前に、メディアテークとか、サポセンとか、駅周辺の施設であるとか、いろんな施設があると思うんです。なので、そこでぜひさまざまな、行政とか、民間とか、共同体とか、そういう垣根を超えたいろんな運営団体、現在の検討委員会の皆様も含めて、何かつくる前に、どういう活動ができるかというの、先に活動をスタート。もしできたらこういう活動をしましょうというのを、ぜひスタートして、もうものができたときにはそこでスタートでき、さらにどんどん深化していけるような、何かイメージとしてはちょっと違うんですけども、東西線ができる前にWEの活動とか何かいろいろやっていたかと思うんですね。例えばなんですが、そういうようなものも含めて、何かいろんな可能性を秘めたことができると思うので、ぜひものができの前に活動というのはスタートして、スタートしながら逆に検討委員会の皆さんの中にも、できたらこんな活動が必要だからこういうようなものができたらいいんじゃないかとか、どんどんそういう意見を入れていけばいいのではないかなと思います。

すみません、長くなりました。

○本江副委員長

ありがとうございます。佐藤さんから、拠点は何か必要でしょう。それはすごく多様な方が関わるでしょう。そしてハードウェアとしての箱物以前に、できる活動からどんどん始めたらどうかと。まとめるとそんなところ、たくさん漏れているかもしれません。

関わる人が多様だということで、遠藤さんに冒頭に、複雑さ、多様性ということで軸として挙げていただきましたので、今のご意見について、遠藤さんから何か反応があればお願いします。

○遠藤委員

佐藤さん、ありがとうございます。まさに佐藤さんがおっしゃるように、一緒にプロセスを歩みながら、きちんと記録とアクションを残して創造していくということが私も大事だなと思って考えています。

そういった意味では、ある意味震災から今までのいろんな活動とか記録というものもすごく大事ですし、今度は大きなアニバーサリーとしての10年ということがあるわけですよ。10年を一つの大きな節目として、例えば、市や、私が活動している現場、皆さんの活動などが、ある意味で問われていくものでもあり、チャンスでもあるのかなと。そこを踏まえて、拠点というものが今後実現していくことになると思うので、10年というところも含めて、やっていけたらいいのかなと改めて思いました。

○本江副委員長

ありがとうございました。では、翔輔さん。

○佐藤（翔）委員

さっき佐藤さんがおっしゃったこと、まず言葉の整理をしなければいけないと思うのは、本江先生が冒頭おっしゃっていましたが、あえて拠点と言っているというのがみそかなと思います。多分、佐藤さんがおっしゃった拠点が必要というのは、施設が必要という意味だと思うんですけども、拠点は皆さんが集まる場であって、機能であって、施設が、例えば箱をつくるというときは施設なのかなということで、そこは分けた方がいいかなと思います。

それで、おっしゃったことの中で、石碑の話が出てきたんですけども、実は中盤に、軸は何かということで、私たちというか私が申し上げなかったことがあったんですけども、それは「忘れない」という軸ですね。ほかのマルチステークホルダーとか、活動とか、災害文化とかという言葉は出てきているんですけども、やはり一番基本的な拠点の軸というのは、今おっしゃった中で言うと「忘れない」部分。何でこういうふうに繰り返して申し上げるかということ、東日本大震災、あれだけ大きな津波、大きな被害があった中でも、やっぱり亡くなった方がいないコミュニティというのが幾つかあるわけですね。そういったことの共通性は、過去に起きたことを忘れていなかったということところが大きな要素です。しかも、この間の山形の地震、覚えていますか。夜10時台くらいのやつ。実は、ある一部の地域で調査させていただいたんですけども、7割の方がすぐに逃げているんですね。それは何でかということ、55年前の新潟地震のことを体験したり知っているからなんですね。やっぱりそういうところの「忘れない」という部分は、この拠点の大きな軸として大切かと思って、今お話しいただいたので付記させていただきます。

○本江副委員長

忘れないために、じゃあ何をを用意して何をするのかということについては、たくさんアイデアが必要だと。ただモニュメントを建てておけばいいかということ、そうでもないですねということやなんかはあるし。だからモニュメント要らないとは言っていないんだけど、あったらいいのかもしれない。ありがとうございます。

ほか、いいでしょうか。じゃあもう一方。じゃあその白いシャツの方。お名前とご意見を。

○傍聴者（高山智行氏）

若林区荒浜地区の高山と申します。今、震災遺構荒浜小学校で嘱託職員として勤めています。

拠点の軸は何かということの話で、私は人だと思っているんですけども、もし拠点で生きる人、働く人がいればというのをちょっと仮定して、今ある拠点に勤める者として、少しちょっと耳を傾けていただければと思います。

ご存じのとおり荒浜小学校は2年前の4月末に東北にある公共施設としては初めて開かれた震災遺構で、今でも毎日300人の方が足を運んでいます。累計来館者数は、先日

20万人を超えました。勤めているのは、荒浜に住んでいた元地域住民がほとんどです。たしか以前の検討会でリズ先生だったかが、荒浜小はパーフェクトですとおっしゃってくださったのは、とてもうれしかったです。

私たちは荒浜小学校で、3月11日を凄惨だったという点で伝えているのではなくて、震災前の暮らしや営み、そして震災後の仙台市の取組を線で捉えて、今に立って伝えています。20万人という数字の背景には、展示されている映像を見て、来なければよかったと涙を流して帰る地元の人や、自分が住むまちで自分事として考える機会になったと手紙をくれる方がいたり、母国語ではなくて片言の日本語で私たちにお礼のメールを送ってくれる外国人の方など、そこに訪れた人の思いが20万人という数字の背景にあるというふうに思っています。それは、こういった資料にもないですけども、表立って目立たないものかもしれないけれども、今後の施設の指針になっていくものだと思います。

それで、ちょっと前段が長くなってしまったんですが、中心部が施設なのか組織なのかわかりませんが、もしそこで生きる人がいるのであれば、生きていける環境があってほしいなというふうに思っています。

今朝も私は出勤して、今日ここに来るということを同僚と話して来ているんですけども、彼も荒浜に住んでいたもので、事情があって今年度中に復興公営住宅から出ていかなければいけない、来春から民間のアパートを借りて生活していかなければならない。ただ、今荒浜小で週5で働いているけれども、さらに仕事を増やさなければ生きていくことができない。日々をやっぱりどう生きていくか、それが今、私たちが今あの場所に立って現実的に抱えている問題でもあります。

中心部で、そこで働くことに、雇用があるかわかりませんが、人生をかける人がいるのであれば、最低限の衣食住があって仕事に専念できる環境があってほしいというふうに思っています。

中心部がどのようなものになっていくかわかりませんが、荒浜小やメモリアル交流館、あと中心部を一つの理念や組織でくくるということが、もしそういうことがあれば、それが本当に正しいかどうかというのはわからないなと思っています。私たちは、荒浜小学校を訪れる人やこれからの荒浜小学校について、荒浜地区について考えることができても、それ以上のことには及ばないとか見えないというのも現実的にあります。3施設を共通の何かでくくったときに、全体的にぼやけて、伝わることも伝わらなくなっていくような気も個人的にはしています。なので、それぞれの拠点性を明確にさせて伝えていくことが重要で、だからこそ中心部でも、その場所に人が立っていてほしいなというふうに思っています。

ここで話されたことも含めて、やっぱり最後は現場においてくるんだなというふうに思っています。やっぱり一度決まってしまったことを覆すということは、今は本当に難しいことだと思っています。荒浜小を業務委託や指定管理に出さないという一度決めて、直営でやっていける施設をコストをかけて業務委託や指定管理に出す理由が立たない。自分たちはこの場所で働きながら施設を運営していくような努力をしても、やっぱりそれだけでは実りづらかったり、ここで働いている人間がこの場所を担っていくというのが自然な流れだとしてもそうはならないという、それは役所の仕組みとして本当にどうしようもないことなのか。荒浜小は本当にじゃあパーフェクトなのか。荒浜小もメモリアル交流館も不完全だと思う中で中心部の議論が進むことに、やっぱり違和感がないわ

けではないです。

なので、もしかしたら私たちは、中心部のあり方が決まるまでは、自分たちの現状は変わらないかもしれないけれども、それでもあの場所に立って生きていきたいなというふうに思っています。なぜなら、もう住むことはできなくても、そこに訪れる人がいて、そこで働くことを誇りだと思っっています。だからもし中心部で、そこで誇りを持って生きていきたいという人がいるのであれば、生きていける環境が最低限あってほしいなと思っいます。

荒浜小でも、やっぱり次の世代に引き継げる人が育つ環境というのが今はなくて、ただそれができなければ、やっぱり点で伝えるということではなく、線で伝えるということが難しいんじゃないかなというふうに思っっています。

だから今私が話したことは、何か変えてほしいというわけではなくて、今ある一つの現状として知っておいてほしいなと思っっています。この検討委員会が何かをつくって終わり、できて終わりではなくて、そこで働く人のこれからを考える機会であっしてほしいなというふうに切に願っっています。

長々とすみませんでした。以上です。

○本江副委員長

ありがとうございます。高山さんから重要なご意見をいただいたと思っいます。新しい拠点の軸として、いろんなことをやんなきゃいけないという話を、いい意味で無責任というか、べき論をいっぱい挙げています。予算大丈夫かという心配は当然あるし、今既にやっていることの中でもなかなか厳しい状況がありますよというご意見もありました。泰さんに、特に人が肝ですよと、軸になっていくのは結局それを持続してやっていける人で活動しやすい環境、まさにおっしゃっていたことだと思うんですが、今のご意見を伺ってどうでしょうか。

○佐藤（泰）委員

実際に現場で働いておられる方の意見ですので、とても重く受けとめました。私はメディアテークの職員ということでずっと運営に携わってきた人間ですけども、やはり施設を運営するというのは、それだけでも結構大変なんですね。運営するということの労力のためにかなりのエネルギーを使っっているんで、そこで何をすべきかということについて労力がそんなに残らなかつたりするということもある。つまり、今、人が軸になると言っましたけれども、人が軸になって、その人の活動のために必要な施設がつくられて、その範囲で施設が活用されるならばいいんだけども、施設をつくと施設を維持することの方が実は大変で、特に公共施設はいろんな意味でこうしなければいけないという制約が非常に大きいので、それを守っていこうとすると結構大変なんですね。むしろ、施設を維持することが主になってしまって、そこで何をするとか、あとはそこで働く人たちの環境とか、それこそ待遇とか、そういったことがだんだん従になっていく。

○本江副委員長

本当はそっちの方が大変だと。

○佐藤（泰）委員

ええ。そういう実態が実はあるんですね。

だから施設を先に考えるのではなく、何をすべきか、何が必要なのかということをも本当によく考えて、そのために人がどのように必要なのか、そこで人が何をするのかということを考えて上で、その人、あるいはその人に関わるさまざまな人々との関係の中で必要な場というのがつくられていってほしいということが、私として一番重要だと考えていること。それがないと、結局は続いていかない。特にこういう震災のような、ある意味さまざまな捉え方とか、あるいは時間が経つことによってまた変わっていくこととか、また新たな災害が生まれるとか、とにかくいろんなことが変わっていくはずのもので、そういったことに向き合っていくということは大変な労力が必要です。その大変な労力をちゃんとみんなで支えていけるような、その覚悟がこの社会に私は必要だと思うし、その前提の上になんか進んでいって、最終的に必要な施設がつけられていくという形になったらいいなと思っているんですね。

○本江副委員長

ありがとうございます。これをつくる市にも覚悟がいるし、これを支える市民側にもその覚悟が必要で、だって前例の余りない新しく専門性の高い仕事をするのだと言って、ふさわしい手当がなされないのでは、やっぱりそれは続かないですよということだと思いますし、それには覚悟や何か、もちろん繰り返し価値の確認が必要だと思いますけれども、そうしたことが要するという議論かと思います。

どなたかありましたら。よろしいですか。ありがとうございます。いいですか。

では、順番で。あとお三方ぐらいは大丈夫かと思います。どうぞ。

○傍聴者（中川政治氏）

石巻から来ました3.11 未来サポートの中川と申します。貴重な機会を設けていただきましてありがとうございます。

拠点の役割、軸についてなので、今出た4つについての意見をちょっと述べさせていただきたいのと、私からの1個をつけ加えさせていただければと思います。

まず、1つ目の軸なんですけれども、やはり私は仙台の拠点は沿岸部もしくは沿岸の人とのつながりというのが今まで出てきていなかったもので、そこにないとやっぱりちょっと余りにももったいないんじゃないかというので、それはぜひとも委員の皆さんにご議論いただきたいなというところです。

そのほか4つは、ちょっと私からも意見を述べさせていただきます。

まず、軽さのところですけども、やはりそれがちょっと表に立ってくるのは、沿岸にいる身としてはちょっと厳しくて、実は某祈念公園の議論で、追悼と鎮魂が第一と言っていたのにどんどん軽くなってくるだろうと言っていたらそのとおりになったよねという議論を、実はしています。それは地元の方が委員会ですら言った発言だったんですけども、ほっといてもどうしても軽くなっている。広島の方も、やっぱり生存者がいなくなるとどうしても伝わらないんだと言っているところに、まだこんなに知っている人がいるのに軽くしていこうというのは何かちょっと違和感がありまして、でももちろん大事なものはわかるので、入り口は軽いけれども、入っていったらむちゃくちゃ重いみたいな、そういうようなまた難しくして申し訳ないんですけども、そこをご議論いただき

たいなというのがあります。

それから、2つ目が、翔輔先生がおっしゃった技術のところなんですけれども、これまた語り部さんの話なんですけれども、「私は自分の子どもの命を手放されたと思っています」とおっしゃっています。震災でお子さんを亡くされたんですけれども。技術というのは先ほど建築的な技術を例に挙げられましたけれども、ソフトの技術。どうやって語り継いでいくかとか、どうやって自分の子どもを守れるかとか、そういったことも災害文化の大事な技術の一つで、ここに来るとその技術がすごく触れられると。やっぱり南海トラフだったりとか、どうしても亡くしてしまいそうなんです。それをここは学べるよというのを技術のところにつけ加えていただきたいなと思います。

あと、学びたい人というのがどこかにあったと、そんなのいるのかっていうところがあったと思うんですけれども、そこも、学びたい人をここからつくっていくというようなこと。今、しっかりと、南海トラフとか首都直下とか、どうしても忘れがちになってしまっているんですけれども、それを学ばなきゃまずいという社会にここから変えていくというらいの意気込みでこのメモリアル拠点をつくっていただきたいので、学びたい人がいるのかではなくて、学びたい人をどんどんつくっていくんだという施設にしていきたいなと思います。

最後が、先ほど言ってくださった、人です。私もお伝えしようと思っていたんですけれども、人間中心の復興とか、神戸のときから、もしくは関東大震災から言われているんですけれども、それがどうしても抜け落ちてしまう。ここは人間中心の運営をしているんだというような、何か胸を張って、先ほど職員さんの話もありましたけれども、人によっているからこんな運営ができていけるんだよと、何か胸を張って言えるような施設を仙台市民の方だったらつくれるんじゃないかなと思って期待して、その5つの点について意見を述べさせていただきました。

長くなりましたけれども、ありがとうございました。

○本江副委員長

ありがとうございます。中川さん、まさに現場で今関わっておられるということで、アクチュアルな意見だったと思います。5つ。

半分自明だから出てこなかったということもあって、沿岸部とのかかわりをどう考えるんですかということが1個。それから、軽さの話。技術の話。あと、学びたい人の話で、ここに誰が来るのか、お客さんは誰なのか。そうはおっしゃらなかったけれども、マーケット前提だと、お客さんがいないんだったらやめるかという話になっちゃう。そうじゃなくて、学びたい人をつくること自体がミッションじゃないかというお話。それから、最後はふさわしい人の扱いというお話でした。

いろいろあるかと思いますが、軽さの話。なかなか重いと思いましたので、大泉さん、今の話を伺ってどうでしょうか。

○大泉委員

中川さんの話、全く異論はないんです。おっしゃるとおりだと思います。何と言うんですかね、実は私のメモには、重さの部分、深刻さ、または大変さだけを強調しちゃったときの、その入りですよ。ここで学んでほしい、ここから学びたい人が育ってほしいという願いを実現するために、何か重いところだけが際立っちゃう。そうすると、理

念は崇高で立派なんだけれども実態が伴っていないということにならないための軽さなので、あくまでもそれは手段であって、そっちが際立っちゃうのは本末転倒ですよというのは全くもってそのとおりなので、そこに異論はございませんというか、むしろ補足していただいたくらいだと思っています。

学びたい人はいるのか、もおっしゃるとおりで、何でこれが災害文化、文化という言葉が私の中でまだしっくりはこないんですけれども、そういったものが世の中で継続的に持続的に発信されていくべきなのは、やっぱり同じことを繰り返さないとか、守れる命を守るとか、そういうところが根っこにあるので、全くもっておっしゃるとおりだと思っています。

○本江副委員長

ありがとうございます。技術のこと、先ほどは建築の技術というお話でしたけれども、語り継いでいくこと、そのソフト的なことも技術だという話でしたが。

○佐藤（翔）委員

説明が不足しておりました。技術について、「技術（工夫）」というのが、厳密な文献の書き方なんですけれども、実は相当昔の研究だったので、そこら辺がごっちゃになっていまして、物理的な技術、ソフト的なものが工夫というふうにその文献では分けられています。私の説明が不足していたので、そこは補足します。

それで、さっきおっしゃっていただいた沿岸部のつながりの部分なんですけれども、何でつながるのかを考えなきゃいけないと思うんですよね。内陸部と沿岸部、中心部が何でつながらなきゃいけないかと。それは実は、さっき本江先生がおっしゃったビジネスの部分に関わってくるんですけれども、ここに来れば何でも参照できるということがとても大事だなと。何でかという、やっぱり災害ってこうなりますという、一通りじゃないというのが一番のみそだと思うんですよね。住んでいる場所、タイミングによっても違うということで、やっぱりいろんな事象、いろいろな体験のことを知らなければ、本当に災害に強くなることはできないので、やっぱり多様な事象、多様な体験を学べるからつながらなきゃいけないんじゃないかなというふうに、今お話を聞いて思いました。以上です。

○本江副委員長

ありがとうございます。では、後ろの方。

○傍聴者（八巻寿文氏）

3.11 メモリアル交流館の立ち上げから3年間、館長を務めた八巻と申します。よろしくをお願いします。

まず、この拠点の運営に関しては、メモリアル交流館ができた、そして荒浜小学校も遺構として運営されている。ただ、運営している現場の組織はちょっと違っている中で、このメモリアル拠点が今後語られていく中で、共通する運営組織というようなことまで踏み込んでいくんだらうなということは期待していますし、何なら防災文化財団ぐらいまでいってほしいなと思います。

そのことを言おうとしたんではないんですが、今日、事務局の最初の説明であったよ

うに、最初の資料の2ページにこれまでの経緯。東日本大震災が発生、その次に仙台市震災復興メモリアル等検討委員会が仙台市に提言、その翌年に3.11メモリアル交流館が開館。このときの検討委員会は、まだメモリアル交流館をつくるなんていうことは最初から言っていないくて、未来の夢だったんですね。このときの資料で、荒井地区にメモリアル交流館が、沿岸部にはいろいろな震災遺構があって、現実実現してきたところなんです。このメモリアル交流館をつくる前の最初の検討委員会に僕は最初から参加させてもらってまして、そこでつくられた地図を見ると、仙台駅を中心に赤い丸がついていてるんですが、これはこの段階でイメージした中心部であって、仙台市の中心部というのは、必ずしも駅、あるいは県庁、市役所を中心にしたエリアではないというお話が出ていたと思うんですね。

本当に東北は広いですから、その広い中で津波の被害を直接受けた県庁所在地で政令指定都市は仙台市だけなんです。ということで、東日本大震災の津波の特に地域の中心が仙台市であるという理由は、僕はそこにあると思います。

最初からあった自分のアイデアではなく、皆さんのお話を聞いて思い浮かんでしまうことが一つあって、それは軸ではないかもしれないけれども、海なんです。海は東北、東日本大震災全体につながる。それから海という自然が教えてくれるものというのは、人が頭で他人に何かを教える以前に、いろんな多様性のある人がいろんな感じ方で学び起こせるといいますか、そういう可能性があると思いますし、そのときに学べることを用意しておく。それで、特に学ばない人は、海、仙台市の海に触れて感じると思いますか、感じるだけで、もういいんだと思います。

今日特にこれまでのお話を聞き、皆さんから出てきたお話も聞きながら感じたのは、今仙台市の沿岸部で起こっていること、それは自然の変化であったり、あの地域で活動している人たちも変化してきています。いろいろな変化があって、そういうものというのは、現地の力、目の前に海があって、その場の力というのは、わずかに地下鉄で15分くらいで来れますけれども、ここまで持ってくることもできないんだなということを感じます。

だから、海は、福島原発のことを考えれば、流されていって世界に迷惑をかけていて、世界ともつながっている、いろんな視点がありますけれども、世界ともつながっているというのも海だし、そこを何というのかな、何となく街なかに箱物をイメージするのではないぞと思ったときに、海をどう生かしていくか、あるいは貞山堀、沿岸部をどう生かしていくか。

だから最初のころのイメージにあった赤いエリアは、実はもうあれは一回消してしまって、ひょっとしたらメモリアル交流館から荒浜小学校、荒浜小学校から貞山堀を底辺にした三角形みたいなエリアになっていくというのが、何かこれまでの経緯の中で僕の中に出てきたイメージなんです。なので、発言の機会があるのでお伝えしておきたいと思いました。ありがとうございます。

○本江副委員長

ありがとうございます。いろんなレベルの話があると思うけれども、海の話。海というものが、今回の災害の特に一つの大きな原因でもあるし、それらの関係を全部つないでいるものとしての、多分にシンボリックな意味も含めて海をどう扱うのかということが抜けているのではないかとということでもあると思うし、その海をきちんと引き受けよう

と思ったら、立地についてもいろいろ考える余地があるのではないか。

まだ何も決まっていませんので、駅につくるとかそういうことではないし、今のようなお話も踏まえながら具体化されていくんだろうと思いますが、今の八巻さんの海はというお話ですけれども、何か委員の方でご意見があれば、引き受けてお話しされることはあるでしょうか。志賀さんどうですか。海にいらして。

○志賀委員

人が何かの中で働くときに、一番怖いのがやっぱりディスコミュニケーションで、その話ができなくなってしまうというときに、やっぱりものすごく大きな問題が立ち現われて、その場所は問題がないのに、その中で起こる生々しいことにたくさんの問題が起きてしまうということがあると思います。

その海というのが今言われましたけれども、それは水でできていて、その水というのが自分たちの体に入って命になるし、いろんなことに変化し得るというメタファーだとしたら、それはきっと人の声のようなものとも言えるんじゃないかなと思っているので、何か中心部と言われる、この仙台市の街なかにそういう場がどんな形であれできる、もしくは自分たちでつくるということになったときに、沿岸部の人たちとのつながりというのは、もうとにかく協働で運営するような形、ディスコミュニケーションが起こらない、一緒にとともに働くというような感覚が得られるような、とにかく工夫と仕組みと情熱をそこに傾けるということは、そもそもの大前提としてあると思ってました。

だから、その中に働く人が毎年替わるのではなくてずっとつながれてあるとか、その人がその中で育っていくとか、いろんな声の交換する場所をいろんな施設の間につくる。それが宮城県の中だけではなくて、例えば岩手だったり、青森だったり、もしくはほかの国であったりというふうにつなぐ努力をどこかでしなきゃいけないし、そこにいっぱい力を使うというのは、必ずやらなければならないことだと思います。

○本江副委員長

ありがとうございます。志賀さんのおっしゃるとおりだと思います。

僕も今のことを受けて言うと、資料2のでっかい今までのこの委員会の議論の一番最後のページに、その他のキーワードというのがあって、これの中に声とかラジオとか路上とか、かぎ括弧つきで、初見ではわかりづらいことが書いてありますが、この施設が、拠点が何かを表現していくときの一つの象徴的なアイテムとして、路上的なものとか、ラジオ放送とか、声と言っている。ラジオをやりたいと言っているんじゃないんだけれども、そういうようなものがこの拠点のある働きの中に象徴的に関わってくるなどという議論はいろんな瞬間に出ていて、多分これに「海」というのが書き込まれて、それはだから海が見えますとかそういう単純なことじゃないかもしれないけれども、何か海を引き受けて、あるいは海を利用した形で表現を行うということになるのかなと思いつつ聞きました。

○志賀委員

あと、その海の中には自分たちが見れない闇のようなものも必ずあって、それは声を出せない人で、その記録にも残らないという、震災に関してすごい闇の部分が必ずあるんだということをどこかで意識として高く持つということをどうしたら私たちはできる

かという、非常に哲学的な問題でもあると思いますけれども、命にすごく関わることだとも思うので、私たちの生と死の部分、もう亡くなってしまった方が声を持っていないということで、私たちもいずれは命が消えるという、そういう循環の部分の闇というのをその中でどう持つかというのを忘れないでいたいなというふうにいつも思いますけれども。

○本江副委員長

はい。ありがとうございます。

少し延びちゃうけれども、お約束しましたのでもう一方、最後のご意見を伺いたいと思います。

この後、委員の方にほんの一言ずつですけれどもお話しただいて、終わりにします。じゃあ、ご意見をお願いします。

○傍聴者（清水チナツ氏）

仙台市青葉区在住の清水といいます。

私はメディアテークの「3がつ11にちをわすれないためにセンター」の立ち上げにも関わったりはしていたんですが、今はフリーランスとして何足ものわらじを履きながら生活しているような状況です。

今日皆さんからもいろいろ話を聞かせていただいて、私もアーカイブのこととかにずっと関わってきていたんですが、それは今までの検討会議でもたくさん議論に挙げられていて、すごくたくましいとか頼もしいなと思いつつながら、そのことについては十分議論されているんだなということもわかりました。

ですので、今日は拠点の軸は何かといったときに出てきているキーワードの中で、自分が少しそのキーワードに対して補足しておいてほしいなと思うことを、ちょっとさまざまあるんですが少しお話ししたいと思います。

震災があったときと、それからもう大体8年半近くの時間が経ちますけれども、結構震災ということ自体、それから津波が起こったこと自体は一瞬のことだったのに、震災後の方がこれほど長くて、こういうことをずっと取り組み続けているということ自体を、改めてやっぱり震災後の時間の長さ、震災そのものよりということを考えさせられています。

そのときに、忘れないといったときに、震災そのもののことももちろんあるんですけども、そこからどういうふうに今私たちが震災後の時間を過ごしてどう生きてきているか、どう生きていくかということも、アクチュアルな意味で震災を忘れないということにつながるんじゃないかなと私自身は思っています。

今日冒頭でデマが流れたこととかの話もありましたが、それは私すごく大事な言葉として受け取っていて、実際に先ほどもどういう拠点になっていくかとなったときに、社会のための拠点をつくるという言葉も話されたと思うんですけども、やっぱり震災後、いろんなデマが流れたり、災害ビジネスという言葉も出ましたが、それがいい意味のとかではなくて、災害をやっぱりビジネスチャンスと捉えて地元の人たちに分断が起こるような動きも実際にたくさんあったと思うんですね。そうなったときに、災害からの被害そのものから備えるという防災の側面もありますけれども、やっぱりそういうデマが起こってしまうとか、分断が起きたり、疑心暗鬼になってしまうということ自体も、

実際その災害によって引き起こされたことで、じゃあその災害の後に起こり得ることに對して、どう私たちがその経験から学んで、もしくは関東大震災の後とか、過去にいろんな災害を経験した人たちがその後に経験したことをどういうふうに学んだ上で、その後の社会とか政治の動きをどう注視していくことができるかというの、震災後を生きている私たちがその拠点で考えていくときに大事なことになるんじゃないかなと思いました。

先ほどから今回のメモリアルの拠点だけではなくて、さまざまいろんな地域に災害のことを取り扱う施設があると言われていました。そのときに役割分担の話も出て、それは本当に私もそうだなと思っていて、じゃあ仙台が中心部にあるからこそやらなきゃいけない、その拠点が担うべきことは何だろうというのを考えたときに、やっぱり中心部にあるからこそ、時間がかかることとか、難儀なこととか、厄介なことに取り組んでいく、それを引き受けていく必要があるんじゃないかなと思いました。

なので、時間がかかることとか、難儀なこととか、厄介なことというのは、一つ例を挙げると、私がすごく震災の後びっくりしたことで、この間の3月11日のときにいろんなところで追悼集会とかも開かれて、私も実際にテレビとかいろんな場所でそういうことが行われていることは見ていたんですけども、ドミューンの宇川さんという方がなさっているインターネット配信の番組があるんですけども、その番組が3月11日に何をしたかという、震災後の民主主義について政治家も学生も含めてみんなで話し合うという対話の番組をやっていたんですね。それを見たときに私はやっぱりちょっとドキッとしたというか、こういうことこそ震災から時間が経っていくときに本当に必要になっていくというか、もちろんその日のことを静かに心を静めていろんなことを考えていくということも必要なんですけれども、同時にじゃあ仙台の街なかとか沿岸部そのものから遠い場所にあるところが何を担わなきゃいけないかとなったときに、そういう対話とか、民主主義自体を考えることにもなると思いますし、そういうたくましさを身につけていくこと、震災後をたくましく歩んでいくことを力づけるような場をつくる必要があるんじゃないかなと思いました。

先ほど学びたい人はいるのかという話があったときに、学びたい人をつくっていく必要があるというのを私もすごく深く同意してしまっていて、そういうところに仙台のどこか拠点をつくるようになったときに、そういう場になっていけばいいかなと思いました。すみません、長くなりました。

○本江副委員長

ありがとうございます。いろいろな論点を出していただいたと思います。災害文化って災害に持ちこたえる立派なことばかりじゃなくて、弱みにつけ込んで邪悪で愚かな部分がたくさんあらわになることも含めて文化で、それをふさわしく対応していく社会をどう考えるかみたいなことも、ここで引き受けていかなきゃいけないことかなというふうにも伺いながら聞きました。

その社会のための施設としてということなので、マリさんに一言、今の意見を聞いて何か思うことがあれば、最後の締めを兼ねてお話をお願いできればと思います。その後、お一方ずつまた委員の方からお話をいただいて、終わりにしたいと思っています。

○マリ委員

じゃあ、最後の締めを兼ねて。

今の社会に関することは答えられないんですけども、何人かのコメントをいただきまして、聞いて、すごく大事なところで思い出すのは、やっぱりキーポイントが現場のこと、現地のこと、地元の方ということで、仙台市の中心部につくるということは、やはり現地のことを優先しないといけないなというふうに考えました。人が来るとか、仙台市にあるとか、いろいろなメリットがあるんですけども、それとともに現地のことの優先度を同じぐらいにキープしないといけないなと。

中川さんが人間中心の運営ということを書いてくれたんですけども、次の議論に進むと、現場中心の拠点の考え方をメインにしないといけないなと思いました。

○本江副委員長

ありがとうございます。じゃあ逆順で行きますので、志賀さん。

○志賀委員

今日のまとめですね。

今日いろんな話を聞いて、やっぱり内容からつくっていく、そこで何をするか。あとは自分たちの持っている工夫とか技術というものはどういうものなのかと。だから、すごく不思議な話ですけども、ハードというか入れ物ではなくて、そこに不思議な場のつくり方で、ちょっとうまく言えないんですけども、自分たちはどういうことを工夫してその場に機能を持たせるか、自分たちは何をそこで語りたいのか、どうやったらその敷居を低く広くフリーな場になるかという、もしくは想像するしかない死とかおぞましかった状況を想像できるのかと。その抽象度の話ですけども、そういうことを具体的に今度は出して行って、それを突き詰めていけば、自分たちの場というのできるのではないかなということを思いますし、これまでこういう時間で議論を重ねて来られたからだと思います。

ともに、働きながら、今ここの私たちの会議も、普段は違うところで働いている人が、働きながら一緒に考えているという、何かそういう場というのは、そういうふうな働き方というのがとても大事な気がしていて、やっぱりそういうふうに震災のことを考えられるか、一生をかけて考えられるかというような内容の具体案を今度は出して行って、何かつなげていくといいかなと思いますけれども。そういうことにちょっと希望を持っています。

○本江副委員長

ありがとうございます。じゃあ、泰さん。

○佐藤（泰）委員

さっき出ていたデマの話にもちょっと関わるんですけども、震災のときにいろいろ出てきた問題というのは、それはそもそも私たちの社会が持っているいろんな無理とかひずみ、ゆがみとか、そういうものが噴き出したという経験でもあったと思うんですね。つまりそういうことを考えると、震災のことを考えるということが、単に防災というだけではなく、私たちの持っている社会の問題点に気づかせる一つの大きなきっかけでもあったと。もちろん災害だけがそのきっかけではなくて、ほかにもいろんなきっかけが

あるんだけど、でもその大きなきっかけの一つとして震災があったということをやっぱり掘り起こして、それについて考えていくということは、ひとえに防災ということだけではなくて、私たちの未来の社会をどうしたらもうちょっとよくしていけるのかということを考えることでもある。そういうことを継続的にやるんだというくらいの気持ちを持っている必要があるし、実はそれが一番大切なんじゃないかと。過去を振り返るということでもあるけれども、そこから学んだことを私たちの社会の改善のために生かしていくという、そういう活動なんだというふうにも思えるなど、改めて思いました。

それから、これは委員としての発言ではなくて、個人的な意見、考えなんですけれども、先ほど海ということ意識したいというお話がある中で、海を意識するために、必ずしも海に近づく必要はないと思うんですね。もちろん海に近づいてもいいんですけども、海に近づくとき波の音とかに意識がとられてしまうことが多いんです。むしろ本当に海を強く感じるとか、震災とのつながりで海を感じるの、個人的には八木山動物公園駅の上の広場から見下ろした海なんですね。その海はちょっと遠いんですよ。遠くて霞んでいたりするんですね。時には見えないこともある。だけれども、福島の方から、三陸は見えないですけども、かなり遠くまでずっと見える。それだけ広い海が私たちの周りであって、これだけ広い海が自分の視界では見渡せないくらいの範囲で津波を起こしたと。そのことがもう見ていると、何か私は胸に迫ってきてちょっと泣きたくなくなったりすることもあるんですけども、そういう接点もあり得る。だから、海に近づくといいだけでもないかもしれないなということ、ちょっと私は意見として申し上げました。

以上です。

○本江副委員長

ありがとうございました。じゃあ、翔輔さん。

○佐藤（翔）委員

皆さん、どうもありがとうございました。

ちょっと資料1に戻っていただきたいんですけども、資料1の4ページと5ページ。メモリアル等検討委員会の提言と取組状況の中に、その経過の中で仙台市の中でどんな取組があったかというのを整理いただいています。実は検討委員会の第1回の中でも、これよりも細かい情報ということで、仙台市の中でのたくさんの活動とか団体さんの情報を整理いただいています。全てここに拾えていないものもあると思うんですけども、こんなにたくさんのいろんな震災のメモリアルに関することが行われている場所はないと思うんですね。つまり、分散して、自立して、これだけのたくさんのものできていて、あと何が足りないかという、協調だと思うんですね。

協調することの大切さというのは、外に向けて圧倒的なパワーというか、見た目ですよね。見える化できて、強いインパクトを与えることができることが一番メインだとは思いますが、前回私がお邪魔したグループの中で、市民の方が何人もいらっしゃったんですけども、今でも発見がありますとおっしゃってくれました。いろんな場に行っている人々の話を聞くと、やっぱり私の体験だけじゃなくて新しい発見があります、いろんな学びがありますとおっしゃっていたので、協調することって外向けでもあるんですけども、やっぱり内向きでもあるんだなと思って、実は今日端々に、横串

とか、つなぐとか、財団みたいなお話もあったので、今日はそのことを頭に思い浮かんだので最後に申し上げさせていただきました。

ありがとうございました。

○本江副委員長

ありがとうございます。じゃあ、大泉さん。

○大泉委員

今日、会場の方々からいただいたご意見も含めて、委員から出た意見も含めて、私の中でそれは違うんじゃないのという考えは一つもありませんでした。むしろそういう見方もあるんだ、そういうところに重きを置かなくちゃいけないんだということがたくさんありました。

一方で、今、翔輔さんに少しヒントをいただいたんですけども、全てをかなえる、全てを目配りして、全てを包含してというメモリアル拠点ってかなうのかなという、全知全能の神がいればそれはやるのかもしれないけれども、なかなかハードル高いなと思いました。とはいえ、やっぱりそれを追求してくれという求め、願いはそのとおりだと思います。

一方で、やっぱりそれを協調したり、いろんな資源がこのまちで、いろんな動いているものも生かしてというためには、それがあつて程度視野に入っていたり、理解できていたり、誰と誰をつなぐともっと有機的な取組になるのかわかっている、多分結果、人がいる必要がある。

やっぱり私、高山さんのさっきおっしゃった、人の手当ての部分に課題はないですかという、今だってどうなんだろうという問いかけほど、この今日のメッセージで重いものはなかったと思います。内容の吟味を我々いっぱいしてきたわけですけども、やっぱりそれをかなえるのは人だし、その人にちゃんと投資をしないことには全て瓦解しませんかということも極めて重いと私は思いました。

ありがとうございました。

○本江副委員長

ありがとうございます。じゃあ、遠藤さん。

○遠藤委員

今日は会場の皆さんのいろんなご意見とともに、改めて考えさせられることがたくさんありました。私たちはこれからも生きていくわけで、私たちの子どもたちも一緒に生きていくと。それは災害とともに生きていくわけで、それを50年、100年、今回は400年という言葉を出していますけれども、続けられるような視点をこの委員会としても入れていく必要があるんだろうなということ。

あとは、さっきマリさんが現場という言葉をおっしゃっていただいたんですけども、現場ってある意味全部現場だと思うので、現場を余りくくり過ぎることを私はしたくないと思うんですね。くくることでしゃべれなくなっている人たちもいるので、そういう意味でそこはちょっと注意していきたいなと。

そういった意味で、やっぱり社会の出来事も、問題も、人々の楽しみも、移ろって

くので、やっぱりそういう社会の移ろいととも、災害とか今日話したようなことを話したり、活動したいって思う人たちと、その時代の中でうまくみんなが意思疎通できる窓とかドアを探しながら、お互いが何か歩み寄ってつくっていきけるっていうような場にするための仕組みとはどんなんだろうかということを考え続けていきたいなと思いました。

○野家委員長

今日は本当に活発な意見の交換ができて、ありがとうございました。

最初の質問で、さっき予算のことが出たんですけども、これは本当に何もまだ決まっています。というか、初めに予算が決められると、やるべきことが制限されちゃうんですね。それでそういう枠をなしに、ずっとこの委員会でも議論を続けてまいりました。

共通の認識としては、一定の予算で箱物をつくって一丁上がりで終わりにするというだけではしたくないということです。ですから今日出たさまざまな意見をまとめますと、やはり活動の空間というか、建物よりは活動の空間、しかもどなたのお話に出てきたのか、物ができる前に活動をスタートさせることが大事だというふうな言葉をいただきましたけれども、まさにそういう建物ではなくて活動の空間をどうつくっていくかというのが、我々が今後考えるべき事柄かなというのを、今日のお話を聞きながら、アゴラという言葉、ギリシャ時代はアゴラに人々が集まっているいろんなことを決めていったけれども、その広場には、アテネに今もアゴラの遺跡がありますけれども、何もない広場なんですね。先ほど、これは志賀さんでしたっけね。壁がなくて屋根がある広場というイメージを出してくださいましたけれども、広場であれば予算は要らないというか金もかからないわけですけども、そこで学びたい人が学ぶし、経験を伝えたい人が伝えていく、そういう活動空間を形づくっていくことが拠点としての役割ではないかというふうに。

だから私、震災で個々の体験というのはそれぞれに譲れない固有の体験というのがあったと思うし、それをこれからも持ち続けていかなきゃならないと思うんですが、それを言葉にしたり対話をしたりしながら共通の経験に、体験を経験に高めていく場というか、それが拠点の意味ではないかと、今日皆さんの貴重な提言をお聞きしながら感じた次第です。

○本江副委員長

ありがとうございます。

皆様のご協力をいただきまして大変活発な意見をいただきながら、阿部さんのグラフィックレコーディングもあって、これは持ちきれないほどの複雑なマップができ上がっている。これも何らか皆さんと共有できるようになると思いますので、こうした形の議論をまた継続していくことになるのかなというふうに思いました。

ちょっと時間を超過しまして申し訳ありませんでしたが、このディスカッションのセッションはここまでとしたいと思います。ありがとうございます。

○野家委員長

ありがとうございました。

今回の議論の内容は、後ほど事務局の方でまとめて、この黒板いっぱいになるほどですからどういうふうにまとめていただくかも楽しみですけれども、次回に向けて準備していただくということになっております。よろしくお願いします。

それでは最後の議事の方に移ります。(4) 今後のスケジュールについてです。事務局の方から説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは、今後のスケジュールについて説明いたします。

資料4の今後のスケジュールについてをご覧ください。

本日がこの3行目の9月1日第4回検討委員会で行いました。本日、拠点の軸などをお話しさせていただいたところですが、次回、10月28日の第5回検討委員会までで役割・機能が見えるような形にしていきたいと考えております。

そして、11月の世界防災フォーラムで、中心部震災メモリアル拠点についてシンポジウムを行う予定です。

その後は、来年1月くらいから夏くらいまでの間に、具体像（機能）などの検討をさせていただきまして、委員会としての提言、報告書を取りまとめていただく予定です。

最後、令和3年3月末までとございますが、パブリックコメントを得て基本構想を策定いたします。

なお、議論や検討の進行状況等により全体スケジュールは柔軟に対応したい。つまり、必ず8回と決まったわけでもございません。

これらの検討委員会は、今回はメディアテークの方でさせていただきましたが、今後、場所は市の庁舎などで行うこともあると思いますが、ずっと公開で続けてまいります。議事録資料の方もインターネット上で公開しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○野家委員長

ありがとうございました。

ただいま今後のスケジュールについて説明がございましたが、何かこの件について、委員の方でも傍聴の方でもいいですが、今後のスケジュールについて、もしご質問等ございましたらお願いします。よろしいでしょうか。

それでは、最後に議題(5) その他ということですが、事務局から何かありましたらお願いいたします。

○事務局（庄子課長）

それでは、事務局から2点連絡がございます。

まず、お手元の座席表の裏面をご覧ください。

先ほどもご説明しましたが、次回、第5回検討委員会は10月28日月曜日の午後3時から開催いたします。会場はまだ決まっておりませんので、会場は決まり次第ホームページなどでお知らせいたします。

また、皆さまのお手元にアンケート用紙をお配りしております。差し支えない範囲で結構ですのでご協力くださいますようお願いいたします。記入後のアンケート用紙は受付にて回収しておりますので、お帰りの際にスタッフへお渡ししてください。

以上が事務局からの連絡でございます。よろしく願いいたします。

○野家委員長

ありがとうございました。

委員の皆様方から何か言い残したこととかつけ加えることとかありましたらお願いします。よろしいでしょうか。

それでは、事務局に進行を引き継ぎますので、お願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは、本日ご参加いただいた皆様、長時間のご議論本当にありがとうございました。

以上をもちまして、第4回中心部震災メモリアル拠点検討委員会を閉会いたします。

本当にありがとうございました。